
アレな妹と苦労人の兄の日常

マーぼー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アレな妹と苦労人の兄の日常

【NZコード】

N1315S

【作者名】

マーぼー

【あらすじ】

これはかなりアレな妹と、その妹に振り回されて苦労する兄の日常での会話を抜き出したものをそのまま描いたものです。

過度な期待はしないでください。（みなみけ風？）

（前書き）

これはかなりアレな妹と、その妹に振り回されて苦労する兄の日常での会話を抜き出したものをそのまま描いたものです。

過度な期待はしないでください。（みなみけ風？

あと、このネタは約先月前に作者が某スレ掲示板にて使っていたネタです。

もしかしたらこのネタを知っている…という方もいるかもです…が、作者はこちらで頑張っていますので、その某スレに関しての感想、メッセ等はお断りさせていただきます。

ご了承ください。

第一話

妹「最近、兄さんの視線がいやらしいです。」

兄「え？」

妹「実の妹に欲情するくらい欲求不満なんですか、もう

兄「濡れ衣だ」

妹「その欲求を、私で解消しようとしたのですね。わかります」

兄「しません」

妹「準備完了です」

兄「いや、だから」

妹「抱いてください」

兄「話を聞け」

第一話

妹「もう、何が不満だと言うのですか?」

兄「不満とかそういうんじゃなくてだな」

妹「私、胸も大きいです」

兄「あ、ああうん、確かに」

妹「もう立派な大人です」

兄「いや俺が言いたいのは」

妹「でも!兄さんが御望みなら剃ります!」

兄「何を!? いや言わなくていい!..」

第三話

妹「わかりました、兄さんがそう仰るのであれば」

兄「わかつてくれるか」

妹「私が抱けばいいんですね?」

兄「わかつてねえじゃん」

妹「私が掘ればいいんですね?」

兄「むしろ明後日の方向じゃん」

第四話

妹「抱くのもダメ、掘るのもダメ」

兄「俺にも人としての尊厳があるので」

妹「私にどうしろと言つんですか」

兄「いや、普通にじい飯にしようよ」

妹「私よりも食事を優先だなんて、兄さんは人でなしです」

兄「そやは言つてないけど」

妹「罰として、兄さんの」飯は食器無しだす」

兄「女体盛りとか言い出したら一週間口を聞かないぞ」

妹「…」飯は大盛りでいいですよね」

第五話

兄「うん、今日の飯も美味そうだ」

妹「それはもう、腕によりをかけて作りましたから」

兄「ありがてえ、ありがてえ」

妹「ちなみに兄さんのお味噌汁には、他にも色々なものをかけてあります」

兄「流しに捨てていい?」

第六話

妹「冗談です、変なものなんか入れてませんよ」

兄「本当だらうな」

妹「もちろんです、私を信じてください」

兄「……わかった、信じるよ」

妹「ちゃんと溶かし込んでますから、見た目的には問題ありません」

兄「べつでも頼もつかな」

第七話

妹「むう、兄さんが冷たい」

兄「お前が普通にしていてくれれば、俺も冷たくせずに済むんだけど」

妹「私は普通ですよ」

兄「そ、うか、普通なのか」

妹「はい！」

兄「……じめん、トイレ」

妹「受け止めましょうか？」

兄「やつぱ普通じゃねえ」

第八話

妹「ひどいです兄さん、薄情です」

兄「律義に付き合つてやつてるだけ優しこと思つんだがど」

妹「そうでしょ、うか」

兄「さて、飯だ飯」

妹「兄さん、兄さん」

兄「なに?」

妹「あーん」

兄「あ、ドラマ始まっちゃう」 ピッ

妹「ああん」

第九話

兄「ところで妹よ、学校はどうだ?」

妹「露骨に話題を変えやがりましたね」

兄「なんだか口調が乱暴だぞ」

妹「そんなことはありません。毎日楽しいですよ」

兄「そうか、それは良かった」

妹「それで、女の子だけの学校生活をエンジョイしている兄さん

はどうなのですか？」

兄「去年まで女子校だったからって酷い言い方だな」

第十話

妹「やっぱり、女の子同士でスカートめぐりしている場面に遭遇してそのままトイレに直行したりする生活を？」

兄「お前は実の兄を猿か何かと勘違いしてるんじゃないだろうな」

妹「そんなに見たいのだったら、私の下着で我慢してくさー」

兄「食事中に立つな、ズボンに手をかけるな」

妹「自分で脱がしたい派ですか」

兄「落ち着いて食事を楽しみたい派だ」

第十一話

妹「最近の兄さんは冷たいです」

兄「冷たいんじゃない、常に冷静なんだ」

妹「それはつまり、常に賢者だと」

兄「おい」

妹「…………」スーサースーサー

兄「こら」

妹「い、イカの匂い…………に、兄さんったら、『ご飯の前くら』は
モジモジ

兄「それは今日の食卓にイカの刺身があるからだよ」

第十二話

プルルルル……

兄「お、電話だ」

妹「私が出できます」

兄「おう、頼む」

妹「……」

兄「何だよこのドラマ、また恋人が病気になるパターンか」

妹「はい、もしもし」

兄「どうせ最終話あたりで死ぬんだろうなあ

妹「兄さんですか？はい、いますけど」

兄「ん？俺か？」

妹「ああ、同じクラスの。学級委員長さんですか、それはそれは」

兄「なんだと、委員長が」

妹「はい、兄がいつもお世話になっています」

兄「委員長は世話焼きで黒髪ストレートの美人さんだからな、これは胸が躍るぜ」

第十三話

妹「はい、では兄さんに……あんつ」

兄「は？」

妹「い、いえ、なんでも……んつ、あつ」

兄「おい、受話器を片手に一人で悶えてビーフした」

妹「もうっ、兄さんったら、今電話中で……ひやあんっ！」

兄「おい…おい…」

妹「お、折り返し電話を……んっ、ダメです兄さん、待ってください
…………んうっ…」

ガチャッ

妹「ああ兄さん、食事の続きを」

兄「…お前は何してくれてんだ」

第十四話

……一時間後

兄「妹。そこに座りなさい」

妹「もう座つてこまか」

兄「なうよろしご。俺は酷い田にあつたぞ」

妹「委員長さんに着信拒否でもされましたか?」

兄「そこまではされなかつたが

妹「そうですか」

兄「今日の放課後までは普通に接してくれてたのに、敬語になつてたぞ」

妹「それだけドン引きだつたんですね。たゞかしショックでじゅう

兄「黙れ全ての元凶」

妹「そうだ、兄さん」

兄「なんだ」

妹「今日、家庭科で宿題が出されたんですよ。手伝つてくれださー」

兄「説教中だつてのに、どんだけふてふてしいんだよ

妹「ボタン付けつて苦手なんですよ

兄「無視して話を進めるなー!」

第十五話

妹「む、む」

兄「お前、料理は出来るのにな」

妹「料理が出来るのと、手先が不器用なのは別問題です」

兄「でもお前、まず針に糸を通すといいで苦戦してゐるじゃん

妹「私が悪いんじやないんです、針の穴が小さすぎるんです」

兄「そんな」と呟かれた針さんも困つたつよ

第十六話

妹「…………」 チマチマチマチマ

兄「ああもつ、貸してみんやー

妹「は、はー」

兄「んー…………ほい、つと」 スルリ

妹「す」こです兄さん、一発です！」

兄「ふふん、狙いを定めれば簡単だ」

妹「この技術を応用すれば、初体験の時も恥をかかずに済みますね！」

兄「だからお前は一言多いんだよ」

第十七話

妹「正に文字通り、針の穴を通すような「コントロール」です」

兄「よせやい、大袈裟すぎるぞ」

妹「そうですか？」

兄「ああ、大袈裟すぎて照れくさい」

妹「では、雌の穴を……」

兄「まあボタンをつけようか」

妹「はあ……」

兄「どうした妹、溜め息なんかついて」

妹「あ、大丈夫です。生理じゃないです」

兄「んなこと聞いてんじゃねえんだよ」

妹「……」

兄「そして何勝手に恥ずかしがつてんだよ」

第十九話
妹「兄さん、そつもの委員長さんと……」

兄「うむ」

妹「その、お、お突き合^ハをされてるんですか?」

兄「……」

妹「あ、間違えました、お付き合^ハをされてるんですか?」

兄「なんで俺も間違いに気付いたやつたんだろ?」

第一十話

妹「それで、ど、どうなんですか？」

兄「どうも何も、委員長は普通のクラスメイトだ」

妹「本当ですか？」

兄「本当ですよ」

妹「首輪をつけたり革製の手錠で縛つたりしてないんですか？」

兄「あのさ、勝手に人の性癖を決め付けないでくれるかな」

第一十一話

妹「でも、本当ならよかったです」

兄「なんでお前が安心するかな」

妹「それはもう、兄さんは最愛の人ですから」

兄「そうかい」

妹「ですから、兄さんの童貞は大事に大事にしなければ」

兄「人を童貞だと決め付けるな」

妹「違うんですか?」

兄「……違わないけどさ」

第二十一話

妹「でも大丈夫です、私もまだですか?」

兄「どうこう理屈だ」

妹「アニメしかり漫画しかりエロゲしかり、古今東西、妹や幼馴染み系のヒロインは処女と相場が決まってるんです」

兄「おい最後の」

妹「昔から一緒にいた幼馴染みが実は非処女だったなんて、トラウマものですよ」

兄「頼むから真面目に語らないでくれ」

第二十二話

プルルルル……

妹「あ、電話ですね。私が『

兄「俺が出る」

妹「いえ、でも……」

兄「俺が出るって言つてるんだ」

妹「わかりました、ご主人様』

兄「誰がご主人様か』

第二十四話

ガチャツ

兄「はい、もしもし。……ああ、会長』

妹「……」ジ——

兄「はい、はい、明日の総会で。ああ、あの資料ですか。それなら
……」

妹「んつ……ちゅつ、ペろ……」

兄「はい、そのファイルの中の。そうです、そのフォルダに」

妹「んつ、んつ……れる、ちゅ、ちゅつ……んんつ」

兄「あ、ちょっと待つてくださいね」

妹「ちゅつ、ペひ、ペひ」

兄「何で人が電話してて真下で指しやぶつてんのお前

妹「雰囲気が出るかな、と」

第一十五話

ガチャツ

兄「……ふつ」

妹「お疲れ様です、兄さん」

兄「お前は俺の学校生活をどうするつもりだ」

妹「もっとふしだらなものにしたいです」

兄「聞いて損した」

第一十六話

妹「兄さん、お風呂がわいてますよー」

兄「おーー」

妹「洗濯物は、いつも通りカゴに入れておいてくださいねー」

兄「わかったー」

妹「パンツは裏返しにして一番上に置いていてもらひないと、後で使う時に助かりますー」

兄「何に使つ氣だこのヤロウー!」

第一十七話

カボーン……

兄「ふう……この時間帯が一番落ち着くなあ」

妹「…………」「ソソソ

兄「ん?」

妹「…………いただきまーす」

兄「いただくな、警察呼ぶぞ! ?」

妹「大丈夫です、使つたら洗つて返しますから」

兄「だから何に使つんだ、いや聞きたくないけどー」

第二十八話

兄「今日も疲れた……さつさと寝よつ」

ガラッ

妹「……」

兄「！」

妹「……」

兄「なぜ俺の布団が不自然に盛り上がっているのか」

妹「中に誰もいませんよ」

兄「いるじゃねえか」

第二十九話

妹「大丈夫です、抱き枕だと思えば」

兄「何が大丈夫なのかわからん」

妹「では、空氣嫁だと思えば」

兄「より一層ダメになつてゐる！」

妹「おはよつゞります、兄さん」

兄「ん……あれ、もう朝?」

妹「そうです、カチカチッとクリックしてゐ間に朝です」

兄「メタ発言やめろ」

第三十一話

妹「いいですよね、着物」

兄「でも大変そんだろ、着付けとか」

妹「大丈夫ですよ」

兄「何が?」

妹「兄さんは、帯をグルグルーっと回すことだけを考えしていくれ
れば」

兄「死んでもやらん」

第三十一話

兄「そうだ、会長から書類を頼まれてたんだった」

妹「兄さん、お茶が入りましたよー」

兄「えーっと……」の対策については、協議を早急に……」

妹「え、挿入ですか?」

兄「お茶ありがとうございます、早く出て行つてくれ」

第三十二話

妹「わあ……」

兄「うわ……」

妹「テレビで映画を見ていて、濃厚なベッドシーンに入るときお茶の間の空気が凍りますよね」

兄「そうだな、違うやつを見よ」

妹「では、先日レンタルしてきたこれを」

兄「なになに、『兄妹・禁断の愛』～暴発する若い性、実妹が兄の手で激しくイキまくる～～』　か！よーし！返してきなさい！～」

第三十四話

妹「兄さん……」

兄「どうした妹、深刻そうな顔をして」

妹「実は、今月……まだ、来ないんですね……」

兄「何が？」

妹「ガス代の集金……」

兄「これ毎月やってるよね」

第三十五話

兄「今日、違法薬物に関しての授業があつた」

妹「なるほど。ドラッグは駄目、絶対！ですよ」

兄「うんうん」

妹「もちろん未成年の飲酒、喫煙も駄目、絶対！です」

兄「もっともだ」

妹「でも近親相姦はセーフですよね」

兄「すっごい笑顔で何言い切っちゃってるの」

第三十六話

妹「プールに行きたいです」

兄「何を突然」

妹「具体的には」

兄「ふむ」

妹「色っぽい水着で兄さんをムラムラさせたいです」

兄「しないよ」

第三十七話

妹「過激に、ビキニなんてどうですか?」

兄「今時ビキニへりこじやなあ」

妹「では紐ビキニなんてどうでしょ?」

兄「うーん」

妹「では紐で」

兄「いや、せめて水着という前提は守らねば」

第三十八話

妹「兄さん、兄さん」

兄「どうした」

妹「大発見です」

兄「ふむ」

妹「早口で『近親相姦』と言つ続けるんですね」

兄「むしろ、それを発見するに至った経緯を聞きたい」

第三十九話

兄「そういうえば、エクスクラメーションマークってあるじゃん」

妹「ありますね」

兄「どうしても言つたらしくから、つい『びつくりマーク』って言つちやつよな」

妹「あはは、わかります」

兄「だよな、みんなそうだよなー」

妹「私もアスタリスクのことを『おじつマーク』って言つちやいますし」

兄「あれ、いつからそういう話になつた?」

第四十話

妹「それで、兄さん」

兄「なんだ」

妹「いつになつたら私を抱いてくれるんですか?」

兄「そうだな、今夜かな」

妹「…………あ、想像だけで軽くイッちゃいました」

兄「そうか」

妹「それで、今夜は」

兄「嘘に決まつてゐるだろ」

第四十一話

妹「見てください兄さん、綺麗な星ですよ」

兄「おお本当だ、綺麗だなあ」

妹「いつもして静かに満天の星空を見上げていると、心が洗われますね」

兄「そうだな…………」

妹「…………」

兄「.....」

「ヴィィィィイイイイ.....」

兄「静寂の中に聞こえてきた謎の振動音に、洗われたばかりの心が汚された気分だ」

第四十一話

妹「見てください、兄さん。幼稚園児たちが電車『じーじー』をしています」

兄「おお、男の子も女の子もみんな仲良く.....微笑ましいなあ」

妹「そうですね、あの純粋さを忘れずに育つて欲しいですね」

兄「うんうん、まったくだな」

妹「あと10年もすればリアルで連結できまーし」

兄「あの純粋な園児たちに謝つてこい」

第四十三話

兄「このホラー映画、話題作なだけに良い出来だなあ」

妹「そ、そうですね」

兄（さすがの妹も、ホラー映画に怯えている間は大人しいな）

テレビ『ギャアアアアアアアアツツツ！』

兄「うおつ」

妹「…………つ…………！」
ビクッ

兄(エクビク)しおやつて……、なかなか可憐(コレン)なやうじやないか)

妹「あ、兄さん。今ビクッとしたのは驚いたからで、決して絶頂を迎えたわけではないですからね」

兄「……はい」

第四十四話

妹「兄さん、兄さん。朝ですよ、起きてくれださー」

兄「んー……あと5分だけ……」

妹「もうつ、その氣だるい返事は何ですか」

兄「仕方ないだろー……」

妹「いくら朝立ちの処理をしたばかりとはいって、そのまま賢者になられましても」

兄「寝ぼけてんだよーーー！」

妹「やつと田が覚めましたか」

第四十五話

妹「私の3サイズは、上から87、56、86です」

兄「……ああ、そりや『立派な』ことで」

妹「私の3サイズを教えたんですから、兄さんの3サイズも教えてください」

兄「何その交換条件、意味がわからないぞ」

妹「では下から……あ、まずは平常時のサイズを」

兄「待て」

妹「長さじゃなくて直径の方にしますか?」

兄「人の話を聞かない娘だね、お前は!」

第四十六話

兄「うおつ、停電だ」

妹「真つ暗ですね」

兄「えーっと、懐中電灯はどうだったかな……」

妹「任せてくれさい、こざと言う時の備えはバッテリードース!」

兄「おお、それは頼もしいな」

妹「はい、どうぞ」

兄「……何これ」

妹「暗いところで光る」ドームです、便利ですね!」キラキラ

兄「目を輝かせてるとこり悪いが、死んでも着けないからな

第四十七話

妹「兄さんはゴムを着けない派ですか、そういうのは良くないですよ」

兄「お前にだけは人の道を説かれたくない」

第四十八話

兄「疲れてる時は甘いものが欲しくなるよな」

妹「グ ノのアーモンドチョコですか」

兄「おう、妹も食べるか?」

妹「いえ、私はいいです……ちょっと苦手なので」

兄「お前つてこりつての苦手だけ?初耳だな」

妹「そういうわけではないのですが、どうも食べにくいといふか」

兄「なぜ?」

妹「何となく、形状がピン、ローターに似てるじゃないですか」

兄「おい俺まで食べにくくなつたぞ」

第四十九話

兄「知つてゐるか？マクナルドの店員にスマイルを注文すると、その店員は後で怒られちやうんだぞ」

妹「なぜですか？」

兄「お客様から要求されるつてことは、常日頃の笑顔が足りない証拠なんだよ」

妹「なるほどなるほど」

兄「まあ、全部の店がそういうわけじゃないからしきれどな」

妹「つまつ、常にローーを挿れて接客すれば」

兄「笑顔とアヘ顔は違つて前に教えたか？」

第五十話

妹「兄さん、ひどいです」

兄「いきなり殴りついた」

妹「今年のバレンタインも、チョコを受け取ってくれませんでした」

兄「それはお前が悪い。せめて去年の反省点を活かせよ」

妹「当然です、回じ轍は踏まない主義です」

兄「では去年の反省点を手短に言つてみる」

妹「全身をチョコでコーティングしようとしたが、思つたより熱くて」

兄「ああ、だから俺は普通のチョコでしてくれと言つたんだよな」

第五十一話

妹「ですから、今年のチョコは普通のものにしたじゃないですか」

兄「チョコは普通のものでも、渡し方に問題がある」

妹「うーん……まあ、確かにちょっと溶けちゃいましたけど」

兄「いや溶けるとかそういう問題じや」

妹「でも、溶けきる前に兄さんが吸い出してくれれば大丈夫だったの！」

兄「普通にラシピングしろよー。」

第五十一話

兄「日めぐりカレンダーッて、ついめぐるの忘れちゃうんだよなあ」

妹「そうですねー」

兄「それで、少ししてから数日分をまとめてめぐっちゃつたり」

妹「あははっ、わかりますわかりますー。」

兄「誰でもあるよな、じつじつ」と

妹「はい、私も兄さんの下着を数日分まとめて返したりしますしー！」

兄「まとめて返す以前に、勝手に借りていかないでくれるかな

第五十二話

兄「四つ葉のクローバーを見つけるために、三つ葉のクローバーを踏みつけてはいけない……うーん、名言だなあ」

妹「兄さん、どうかしましたか？」

兄「ああ、四つ葉のクローバーが……」

妹「え？ 四つん這いの？」

兄「名言が台無しだよチクショウ」

第五十四話

兄「お菓子が余っちゃった……えーっと、輪ゴム、輪ゴム、輪ゴム……」

妹「探し物ですか？」

兄「ああ、輪ゴムってござるといつ時に無いんだよなあ」

妹「でも、財布の中に入れっぱなしあは良くないですよ。劣化して中で破ける恐れも……」

兄「輪ゴムって言つたの聞いてなかつた？」

第五十五話

兄「輪ゴム……あつあつた。これで袋を……」

グルングルン

バチンッ！

兄「痛つ！」

妹「どうかしましたか？」

兄「いや、『ゴムが』

妹「陰毛を巻き込みましたか」

兄「だから輪ゴムだつて言つてんだろー！」

第五十六話

兄「妹、ちょっと座りなさい」

妹「はい」

兄「……いや、なんで俺の膝に座るの？..」

妹「だつて、兄さんが座れと」

兄「だからつてこれはおかしいだろ。普通に向き合つて座つてくれよ」

妹「対面座位とこりやつですね。兄さんのお望みでしたら」

兄「テーブルの向い側に座れってんだよ」

第五十七話

兄「お前が思春期といつのはわかる、しかしもう少し恥じらうことのをだな」

妹「恥らつてますよ、ちゃんと」

兄「じこがだ」

妹「今も振動は最弱に設定しますし」

兄「何のだ。いや説明しなくていい」

兄「まあ、思春期とかは関係無いかもな」

妹「ところで?」

兄「お前、わりと昔から耳年増だし」

妹「そんなことないです、普通です」

兄「だつてお前、まだ小学校低学年の時……」

・・・

兄(7歳)「ねえねえ、なんでサンタさんは、くつした『プレゼント』
トをいれてくれるのかなー?」

妹(6歳)「たぶん、くつした『プレゼント』の『チ』なんですよ、
にこさん」

・・・

妹「あれば、私なりの真剣な考察です」

兄「どんな小学生だ」

第五十九話

兄「とにかく、しばらく下ネタ禁止」

妹「わかりました！」

兄「やけに良い返事だな。本当にわかってるのか？」

妹「もちろんです」

兄「ならいいんだけど」

妹「言葉より行動で示せといふことですね。さつやくお風呂に……」

兄「何もわかつちゃいないよお前は……」

第六十話

兄「そういえば、俺の友人に『鎖骨』のことを『左骨』だと勘違いしてる奴がいてな」

妹「あははっ、そつなんですか？」

兄「だから、鎖骨の反対側は『右骨』と呼ぶと思ってたんだと」

妹「そんな勘違い、ありえるんですか?」クスクス

兄「なー、普通はありえないよなー」アハハ

妹「まあ私も、『打ち首』のことを『右乳首』だと思ってましたけどね。つまり右の乳首を……」

兄「お前に俺の友人を笑う資格は無い」

(後書き)

「マ「とまあ 今回は軽く短編をあげてみました。」

兄「……」

妹「～～」

マ「……まあまだネタはあるんですが、皆様のリクエストがあればあげようかと……まあこれもすでにスレであげたネタだけども（ボソツ）

劉「では皆様、感想いつぱいくださいねー。」

マ「なんでお前がいるんだよ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1315s/>

アレな妹と苦労人の兄の日常

2011年4月6日02時02分発行